

—研究報告—

看護学生の看護師に対するイメージおよびキャリアコミットメント —学年による比較—

室津 史子¹⁾・贅 育子¹⁾・重本津多子²⁾・今村 美幸¹⁾・藤原理恵子¹⁾

抄 録

本研究の第一の目的は、看護系大学生の看護師イメージとキャリアコミットメントについて学年による特徴や違いを明らかにすることである。第二の目的は、看護教育において看護職としてのキャリアコミットメントを育成するための支援方法についての示唆を得ることである。そこで、倫理的配慮のもとに、私立看護系大学生を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。

看護師のイメージについては、因子分析を行い【専門的特性】【職業的魅力】【外観的調和】の3因子が抽出された。【職業的魅力】因子の得点は1年生が最も高く学年が上がるにつれて低くなり、【外観的調和】因子の得点は2年生が低かった。また、キャリアコミットメントは、情緒的要素の得点は学年進行により下がり、計算的要素と規範的要素の得点は2年生、3年生と上がり、4年生では低下した。

資格取得を優先して入学した後に、抱いたイメージと異なる現実を自覚する学生の様子があがえ、学年の特性に応じたサポート体制や、職業観の成長について考慮した働きかけの必要性が示唆された。

キーワード：看護学生 看護師イメージ キャリアコミットメント

I. 緒言

大学生という時期は、大部分の学生は青年期にあり、“自分とは何か”という自我同一性の確立に向けて重要な発達課題をもつ自分探しのモラトリアム期間である。この学生時代に一般の大学生は自らの適性をみつけ、就くべき職業を選択していく。看護学生においても青年期という点では同様の発達課題をもつと考える。

しかし看護学生の場合は、職業人として自己をどのように決定し、自己がそれにどのように関わるかという職業コミットメント（以下キャリアコミットメントとする）は、入学前から始まっており、職業的同一性形成は早期完了型が特徴である¹⁾と言われる。そのうえで、入学後早期から職業に直結した専門科目を学習することとなる。したがって看護教育において、学生が自分自身の職業について十分な学びを得るとともに、職業的アイデンティティの確立に向けて支援することが重要となる。

コミットメントは、組織や職業に対する心理的態度を意味しており、これまで個人の組織に対する帰属意識を

表す概念として組織におけるコミットメントを中心に検討されていた。しかし、Meyerら²⁾によって職業におけるコミットメントにも応用されるようになった。さらにキャリアコミットメントは学校教育や職業・職場等を通して形成され、職業や職場への適応に密接に関係する³⁾。つまり看護学生のキャリアコミットメントは、学習態度やストレス対処行動にも影響をおよぼすと考えられ質の高い教育を進めるうえで重要な視点となる。

しかし大学全入時代を迎えた現在、看護系大学数も増加し、2012年には209校⁴⁾となった。研究者が日々、学生と関わる中で、入学時に抱いていた看護師イメージが変化し、看護職を選択したことに悩んだり学生生活に不適應を起こしたりする学生が増加している感がある。その一つの要因として、就職難の昨今、自らの職業として確固たる思いを持って看護系大学へ進学するというよりも、ひとまず就職に有利な進路選択として進学したという状況があるのではないだろうか。

看護師イメージというのは学生の職業に対する自己像が反映されたものであると考えられ、学生の職業意識の発達過程を理解する一助となる。看護師イメージの因子構造に関する先行研究では、因子として専門職イメージや外観的なイメージ、魅力的職業イメージが抽出されている^{5)~7)}。さらに学年進行による看護師イメージへの影響について、やさしさ、あたたかさといったイメージ

1) Fumiko Murotsu Ikuko Nie

Miyuki Imamura Rieko Fujiwara

広島都市学園大学健康科学部看護学科

2) Tsutako Shigemoto

天理医療大学医療学部看護学科

は学年進行とともに低下し、逆に仕事の大変さは上昇するとされる⁸⁾。また、看護系大学生と短大生では、短大生は学年進行にともなって看護師イメージが低下するが、大学生は好イメージになるという報告⁹⁾と、看護師イメージは学年進行にともなって肯定的イメージに変化する¹⁰⁾としたものがある。

したがって、看護師イメージと学年進行との関係は明確ではなく検討する余地がある。そして大学教育の現状や社会情勢の変化による看護学生のキャリアコミットメントの変化について検討することは、キャリア教育を進める上で有意義である。

II. 研究目的

本研究の目的は、看護教育において看護職としてのキャリアコミットメントを育成するための支援方法についての示唆を得ることである。

そのために、看護系大学生の看護師イメージとキャリアコミットメントについて横断的に調査し、学年による特徴や学年進行に伴う変化について検討する。

III. 研究方法

1. 対象者

A私立大学看護学部在学中の1年次～4年次生446名を対象に調査を実施した。回収できた調査票は424名(回収率95.1%)であった。記載不備や背景の大きく異なるものを除外し348名(女性270名、男性78名)を分析対象とした。有効回答率は82.1%である。平均年齢は、1年次生18.3±0.7歳、2年次生19.3±0.6歳、3年次生20.2±0.5歳、4年次生21.6±0.9歳であった。

2. 調査方法

各学年別実施される講義時間の前あるいは後に、無記名自記式質問紙調査を実施した。講義科目は研究者以外の教員が担当する科目で、趣旨を説明し担当教員の了承が得られた場合とした。調査票の一枚目に趣旨を記載するとともに研究協力に対する同意の有無を記入する欄を設けた。記入後の調査票は学生個々が封筒に入れて閉封し、設けた回収箱により回収した。

3. 調査時期

平成25年6月初旬～6月末。

4. 調査内容

1) フェイスシート

性別、年齢、職業経験の有無について尋ねた。

2) 進路選択に関する質問

① 看護系の学校についての情報の入手先(受験情報

誌、受験生用サイト、受験考慮中の学校のホームページ、中学校の教師、高校の教師、友人・知人、親・兄弟、予備校・塾、その他の9項目)について、5件法(全く当てはまらない1点～全く当てはまる5点)で回答を求めた。

② 看護系の学校への進学のかきかけ11項目、理由15項目については、いずれも5件法(全く当てはまらない1点～全く当てはまる5点)で回答を求めた。

③ 看護師に対するイメージについては、工藤ら¹¹⁾の研究で使用された「責任感の強い-無責任な」「重要な-重要でない」などの20項目の形容詞対を提示し、SD法による7段階評定法で測定した。

④ キャリアコミットメントについては、石田・吉田¹²⁾の因子分析結果と、石田ら¹³⁾の因子分析結果を基にして、情緒的要素8項目、計算的要素4項目、規範的要素3項目を用いた。各項目について、5件法(全く当てはまらない1点～全く当てはまる5点)で回答を求め、各要素の平均得点をその要素得点とした。

3) 分析方法

進路選択については平均値および標準偏差を求めた。また、看護師に対するイメージについては、最小二乗法Promax回転による因子分析を行った。次に、学年による違いをみるために、看護師に対するイメージの各因子の平均得点と、キャリアコミットメントの情緒的要素、計算的要素、規範的要素の得点について、一元配置分散分析と多重比較を行った。

なお統計処理にはSPSS Statistics16.0を使用した。

4) 倫理的配慮

対象者に、調査の目的・意義、調査票は匿名であり回収後は調査票の守秘管理を徹底した上で集計し、回答した内容に関して研究協力者の迷惑とならないことを口頭および調査票に記載して説明した。

さらに研究への協力の拒否・中断の自由、協力の有無により不利益を被ることはないことについても口頭および調査票に記載して説明した。研究協力への同意については敢えて記名するのではなく、同意に対する記載欄に○印を記入する形式とし、協力の有無について個人特定ができないようにした。

なお本研究は、研究者の所属する機関の研究倫理審査委員会の承認を得ている。

IV. 結果

1. 各学年の概要および進路選択について

1) 各学年別の性別および平均年齢

1年次生94名のうち男性22名(23.4%)、2年次生97名のうち男性23名(23.7%)、3年次生97名のうち男性19名(19.6%)、4年次生60名のうち男性14名(23.3%)であった。平均年齢は、1年次生 18.3 ± 0.7 歳、2年次生 19.3 ± 0.6 歳、3年次生 20.2 ± 0.5 歳、4年次生 21.6 ± 0.9 歳であった。

2) 職業経験

職業経験のあるものは、1年次生4名(4.3%)、2年次生12名(12.4%)、3年次生14名(14.4%)、4年次生14名(23.3%)であった。

3) カリキュラムについて

1年次は主に一般教養や解剖生理学の科目が配置されている。2年次後期からは看護の各専門領域の概論や基礎看護学実習、3年次後期から専門領域の看護学実習となる。この看護師受験資格に関する科目については、全学年共通である。

2. 進路選択について

1) 看護系の学校についての情報の入手先の比較

入手先として該年度(5件法によるMean \pm SD)の高いものは、どの学年も高校の教師、受験情報誌の順であった。また中学校の教師や子備校・塾は低かった。学年間で差がみられたのは受験生用サイトであり、1年次生は他の学年と比較して高かった(F(3,344)=12.299,<.001)。

2) 看護系大学への進学のかきかけ

看護系大学へ進学しようと思ったきっかけは、どの学年も「看護師の働きぶりを見て」が最も高く、全体の平均は 3.46 ± 1.34 であった。また「看護師の働きぶりをみて」は、学年間に有意差がみられ、1年次生は他のどの学年よりも高かった(F(3,344)=5.523,<.01)。「1日看護体験に参加して」も、1年次生は4年次生よりも高く(F(3,344)=6.200,<.001)。「教師に勧められて」が進学のかきかけという回答は1年次生が4年次生よりも高く有意であった(F(3,344)=4.247,<.01)。

3) 看護系大学への進学を決めた理由

看護系大学への進学を決めた理由については、全学年共に「看護師になるため」が $4.70 \pm .79$ と進学理由のトップであり学年間の差はみられなかった。全体平均で次に高いのは、「資格が欲しくて」や「一生役立つ知識技術の修得のため」であった。

また、全学年共に「本命の進学先が受からなくて」は 1.89 ± 1.30 と最も低く学年間に差がみられなかった。次に低かったのは、「ほかに進む道が見つけれなく

て」であった。

学年間の差をみると、「保健師になるため」は、1年次生が2年次生よりも高く有意(F(3,344)=4.490,<.01)であった。また「一生役に立つ知識技術の修得のため」も、1年次生が2年次生および4年次生よりも高く有意であった(F(3,344)=4.207,<.01)。「仕事を通じての人間の成長のため」も、1年次生が4年次生よりも高く有意であった(F(3,344)=4.486,<.01)。さらに「社会への貢献」も、1年次生が2年次生・3年次生・4年次生よりも高く有意であった(F(3,344)=8.048,<.001)。「社会的必要性を感じて」も、1年次生は4年次生よりも有意に高かった(F(3,344)=4.442,<.01)。

次に「資格がほしくて」という項目は、4年次生が1年次生よりも高く(F(3,344)=3.648,<.01)、「家族や周りの人の面倒を見るため」は、2年次生が3年次生および4年次生よりも高く有意であった(F(3,344)=3.710,<.05)。「社会的評価・地位を得るため」は、2年次生が3年次生よりも高く有意であった(F(3,344)=2.628,<.05)。

そして、「ほかに進む道が見つけれなくて」は、2年次生が 2.62 ± 1.28 で最も高く1年次生の 2.09 ± 1.28 との間で有意な差がみられた(F(3,344)=2.710,<.05)。

3. 看護師イメージについて

1) 看護師イメージの7段階による評定結果

どの学年においても、「責任感の強い」「重要な」「価値のある」「労の多い」のイメージについては、好イメージであるが、「自由な」「若々しい」は好イメージではなかった(図1.)。

学年別にみると、多くの項目で1年次生が好イメージをもっており、「明るい」は4年次生よりも1年次生が有意に高い(F(3,344)=9.397,<.001)。「活気のある」も4年次生よりも1年次生が高く(F(3,344)=3.145,<.05)、「温かい」も4年次生よりも1年次生が有意に高かった(F(3,344)=8.377,<.001)。また、「やさしい」についても4年次生よりも1年次生が(F(3,344)=9.977,<.001)、「安定した」も4年次生よりも1年次生が高く有意であった(F(3,344)=3.035,<.05)。さらに「望みのある」も、4年次生よりも1年次生が高く(F(3,344)=5.276,<.01)、「親しみやすい」も4年次生と1年次生の間で有意な差がみられ(F(3,344)=8.214,<.001)、「好きな」についても4年次生よりも1年次生が有意に好イメージをもっていた(F(3,344)=2.738,<.05)。

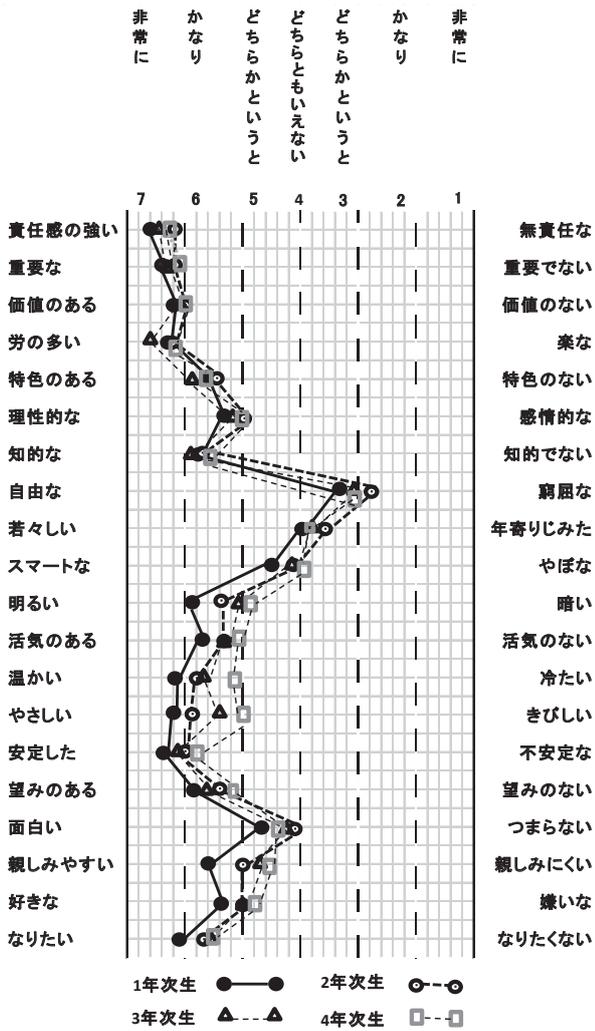


図1. 看護師イメージ各項目の評定値の学年別比較

2) 看護師イメージの因子構造

最小二乗法によるPromax回転により探索的因子分析を行った。初回の因子分析結果から、因子負荷量0.4以上で他の因子への負荷量0.35未満、共通性0.3以上、スクリープロットを参考に因子分析を繰り返し、Ⅲ因子が抽出された(表1.)。

第Ⅰ因子は「重要な」「責任感の強い」「価値のある」「労の多い」「知的な」「特色のある」「安定した」の7項目で【専門的特性】、第Ⅱ因子は「好きな」「なりたい」「温かい」「親しみやすい」「明るい」「面白い」の6項目で【職業的魅力】、第Ⅲ因子は「スマートな」「若々しい」の2項目で、【外観的調和】と命名した。

3) 看護師イメージの因子別比較

各因子の平均点を従属変数、学年をそれぞれ独立変数として一元配置分散分析を行った。その結果、第Ⅰ因子である【専門的特性】については学年間の差はみられなかった(図2.)。第Ⅱ因子である【職業的魅力】は学年進行に伴って低くなっており1年次生は他の学

表1. 看護師イメージの因子分析

最小二乗法によるPromax回転

第Ⅰ因子 専門的特性 (7項目) $\alpha = .835$			
2. 重要な	.859	.073	-.027
1. 責任感の強い	.788	.072	-.136
3. 価値のある	.767	.085	.017
4. 労の多い	.646	-.284	.060
7. 知的な	.538	-.016	.219
5. 特色のある	.431	-.031	.230
15. 安定した	.428	.179	-.068
第Ⅱ因子 職業的魅力 (6項目) $\alpha = .830$			
19. 好きな	-.139	.804	.149
20. なりたい	-.041	.797	-.110
13. 温かい	.214	.652	-.128
18. 親しみやすい	.064	.652	.049
11. 明るい	.049	.561	.050
17. 面白い	-.098	.457	.329
第Ⅲ因子 外観的調和 (2項目) $\alpha = .691$			
10. スマートな	.088	-.048	.736
9. 若々しい	.005	.068	.677

因子間相関	I	II	III
専門的特性 I	--	.501	.152
職業的魅力 II		--	.409
外観的調和 III			--

年よりも高く有意であった($F(3,344) = 8.707, <.001$) (図3.)。そして第Ⅲ因子【外観的調和】については、1年次生が2年次生よりも高く有意であった($F(3,344) = 2.638, <.05$) (図4.)。

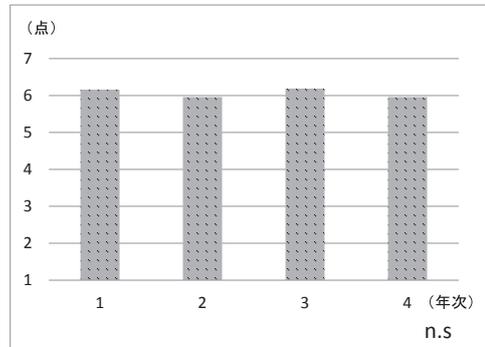


図2. 専門的特性イメージ因子の平均点の学年別比較

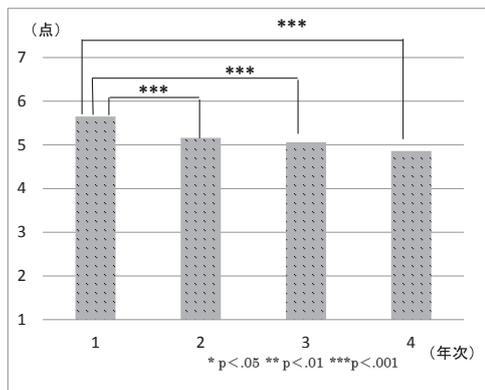


図3. 職業的魅力イメージ因子の平均点の学年別比較

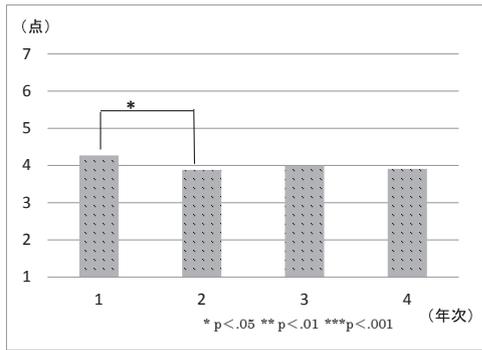


図4. 外観的調和イメージ因子の平均点の学年別比較

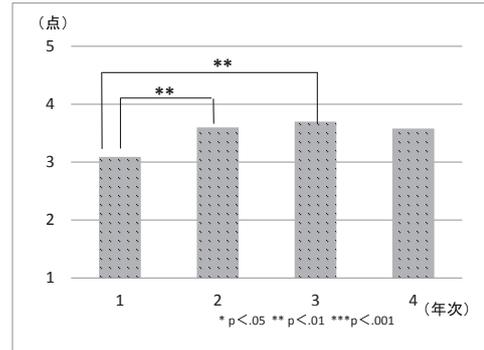


図7. 規範的要素の平均点の学年別比較

4. キャリアコミットメントについて

キャリアコミットメントの情緒的要素、計算的要素、規範的要素の3つの要素の平均点を従属変数、学年をそれぞれ独立変数として一元配置分散分析を行った。

その結果、情緒的要素の得点は学年進行により下がり、計算的要素と規範的要素の得点は2年次生、3年次生と上がり、4年次生では低下した。

情緒的要素は、1年次生と他の学年間で有意差がみられ ($F(3,344)=6.592, <.001$)、1年次生が他の学年よりも高かった (図5.)。計算的要素は、1年次生よりも2年次生および3年次生が高いという結果であり有意差がみられた ($F(3,344)=6.115, <.001$) (図6.)。また、規範的要素についても1年次生よりも2年次生および3年次生が高く有意であった ($F(3,344)=5.118, <.01$) (図7.)。

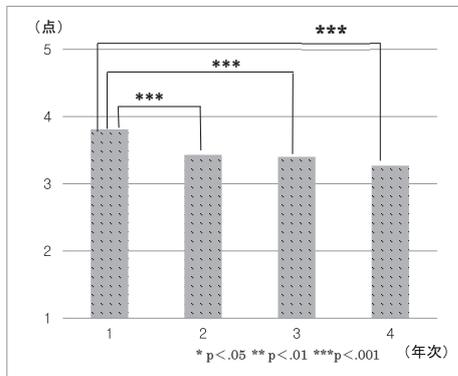


図5. 情緒的要素の平均点の学年別比較

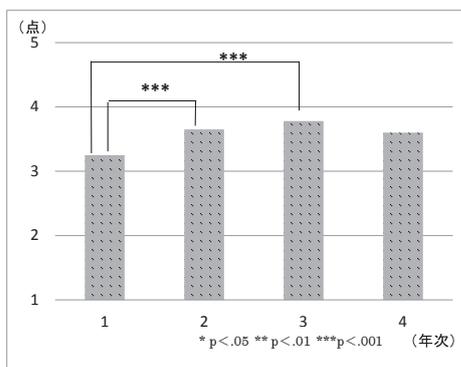


図6. 計算的要素の平均点の学年別比較

V. 考察

1. 看護系大学への進路選択からみた学年別の概要

看護系大学数の増加とともに、男子学生ひいては男性看護師数も増加し、2000年から2010年の就業看護師数の年次推移¹⁴⁾をみると、男性看護師数は倍増している。以前は白衣の天使に代表されるように、看護師は女性特有の職業とみられていた。しかし、看護師は国家資格を持って生涯を通じて働ける職業であり、看護系大学の増加にあいまって男性が選択する機会も多くなっていると考える。看護系大学における男子学生の割合は、2011年度では約1割という状況である¹⁵⁾が、今回の対象者をみると、全学年ともに2割前後を男子学生が占めている。したがって本研究で対象とした看護学生は男子学生の割合が高い集団という特徴がある。男子学生の割合は国公立よりも私学が高い状況にあり¹⁶⁾、入学試験の多様な私学の方が男子学生も入学しやすいことが考えられる。

学年別にみると、1年次生は他の学年と比較して看護系の学校の情報の入手先は受験生用サイトという回答が多くみられている。また、進路選択のきっかけも教師に勧められてや看護師の働きぶりを見て、あるいは一日看護体験に参加してという項目の平均点も1年次生が4年次生より高い。これは職業経験者の割合が低いという特徴とも関連し、一般的な高校生の進路選択の動機と考える。また、看護系大学への進学を決めた理由の平均点が他の学年より高い項目として、仕事を通じて人間的に成長したいや社会への貢献があがるように、看護師という仕事への期待や看護師像へのあこがれを持つ者が多い集団である。

2年次生は、進学を決めた理由として、家族や周りの人の面倒をみるためや社会的評価・地位を得るため、他に進む道が見つけられなくての項目の平均点が他の学年と差があるという特徴がみられる。看護師になるためという思いはあるが、看護師という職業への期待やあこがれは他の学年よりも低いと推察される。カリキュラムや

男子学生の割合が1年次生と異なる集団とは言い難く、学年進行によるものに加え、集団の特性を踏まえた対応を適宜考えていく必要性が示唆される。

3年次生は他の学年よりも若干、男子学生の割合が低いという特徴を持つ。

そして4年次生は、職業経験者の割合が4分の1程度という集団である。進学を決めた理由として資格が欲しくてという項目の平均点が1年次生よりも高いなど、漠然としたあこがれではなく就職に有利であるなどの現実的な職業選択として看護系大学への進路選択をした学生が多い集団と考える。

2. 看護師イメージについて

看護師イメージは、責任感の強い、重要な、価値のあるなどに好イメージであるように、専門性を一つの特徴として捉えていることがうかがえる。

今回の因子分析結果においても【専門的特性】が第1因子としてあがっている。この因子は学年による差がみられなかったことから、学年進行や各学年の集団特性に関わらず、看護を専門職業として学ぶべきものと考えていると推察する。

看護師イメージの因子分析では、【専門的特性】【職業的魅力】【外観的調和】の3因子が抽出され十分な内的整合性が得られた。因子分析結果を先行研究^{17) 18)}と比較すると看護師の専門的特性や職業的魅力は一致するが含まれる項目数は異なっており、【専門的特性】の下位項目として、今回は「労の多い」、「知的な」「特色のある」が抽出された。また【職業的魅力】にも「温かい」「親しみやすい」「明るい」「面白い」の項目が抽出された。そして新たに【外観的調和】として「スマートな」や「若々しい」が抽出されたことは、専門性以外の職業的魅力や外観的な要素は集団特性によって異なることが示唆される。今後さらに信頼性、妥当性を検討した尺度の開発が必要である。

学年間では、【職業的魅力】は年次進行に伴って低くなっている。これは、学年進行にもなって増えてくる専門科目の難しさや臨地実習における臨床現場の厳しさを体感する事によると考える。学年進行にもなって、あこがれの段階から現実の厳しさを直視した反応となるという先行研究¹⁹⁾とも一致している。【外観的調和】は2年次生で下がっている。これは岩永・山本²⁰⁾の結果に類似している。さらに看護師という職業への期待やあこがれが他の学年よりも低いという集団特性も影響していると推察する。

青年期は疾風怒濤の時期とも言われるように、迷い悩

みつつ考え自己をみつめ、これを乗り越えることも青年期の課題である。したがって学習の大変さや実習の負荷にともなう看護師イメージの低下と捉えるのではなく学生の職業に対する自己への問いかけによるものと考えれば現実の厳しさを直視する反応は学習段階として必要でもある。

しかし大学の4年間を看護の基礎を学び終える期間とすれば、卒業年次には看護師という職業に対する期待が持てることを目標とするような学習支援を行う事が望まれる。

3. キャリアコミットメントについて

キャリアコミットメントでは、職業への愛着や同一化を示す情緒的要素が、学年進行に伴って低下していた。これは、看護師イメージ同様に、学習を深める中で、看護の奥深さや現実の厳しさを自覚する過程による変化と考える。石田ら²¹⁾の研究では、情緒的要素は入学時に最も高く、2年次で一旦低下し、3年次（実習終了後）には再上昇しており、臨地実習がキャリアコミットメントに影響を与えていた。しかし、今回の結果をみると病院実習を終えている4年次生においても情緒的要素は低下している。菊池²²⁾が、教師の情緒的サポートは看護への興味・関心と関連し、教師が悩みを聞いてくれ、心配してくれると感じられることは、学生の看護に対する興味・関心を高める要因であると述べている。今回の対象者が教員との関わりをどのように感じているかについては検討に至っていない。実習との関連や教員と学生との関わりが、学生のキャリアコミットメントにどのように関連があるのかについて今後検討していく必要がある。

辞めると失うものが大きいといった計算的要素と義務感といった規範的要素は、2年次生、3年次生と上昇し、4年次生では低下した。経済的援助や家族の期待を背負っていたり、まだまだ他者の目や評価が気になったりする看護系大学生にとって、学年進行とともに進路変更の選択が決断し難く感じる事が一般的と考えられる。たとえば、授業料の負担も大きい私学の看護系大学生にとって資格取得に向け、今さらやめるのはもったいないなどの判断要素である。ただ、4年次生で規範的要素が低下していることは、職業経験者の割合が多く、現実的特徴を持つ集団と思われる学年特性と関連しているとも考えられる。これについては今後検討していく必要がある。

また矢野²³⁾は、個人における特性的自己効力感に変化しなくても、学生生活のなかで、看護に対する思いは変化する。そして、学習の動機づけや学習支援方法を入

学動機によって変更する必要はないと述べている。したがって、入学動機の差がみられても、看護に興味・関心を持って、魅力的な職業として学ぶことを継続できるような関わりが必要である。また、職業経験の有無といった学生の背景の違いなどによる学年の特徴を踏まえた支援方法の工夫が望まれる。

VI. 結論

看護系大学生は、看護師に対するイメージとして「責任感の強い」「重要な」「価値のある」「労の多い」といった専門性に好イメージをもっているが、「自由な」「若々しい」は好イメージではないことが明らかとなった。

また、看護師イメージの因子分析により、【専門的特性】【職業的魅力】【外観的調和】の3因子が抽出された。因子構造についてはさらに検討を深める必要がある。

看護師イメージの学年間比較では、【専門的特性】においては差がみられないが、【職業的魅力】は学年進行に伴って低くなり、【外観的調和】は1年次生よりも2年次生が低くなっていた。

キャリアコミットメントの学年間比較では、情緒的要素が学年進行に伴って低下し、計算的要素や規範的要素は2年次生、3年次生と上昇し4年次生では低下した。

看護に興味・関心を持って、魅力的な職業として学ぶことを継続できるような関わりとともに、学生の背景の違いなどによる学年の特徴を踏まえた支援方法の工夫が必要であることが示唆された。

今回は横断的調査によるものであり、学生個々の変化から捉えていくことや看護師イメージやキャリアコミットメントに影響する要因について検討を重ねることは今後の課題である。

文献

- 1) 岡本裕子：アイデンティティ生涯発達論の射程, ミネルヴァ書房, 250, 2002.
- 2) Meyer, J. P., Allen, N. J., & Smith, C. A. : Commitment to organizations and occupations : Extension and test of a three-component conceptualization, *Journal of Applied Psychology*, 78(4), 538-551, 1993.
- 3) 石田真知子, 柏倉栄子, 杉山敏子：看護学生のキャリアコミットメント尺度の検討, *東北大学医療技術短期大学紀要*, 8(1), 87-93, 1999.
- 4) 日本看護系大学協議会：一般社団法人日本看護系大学協議会平成24年度事業活動報告書, <http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2013/06/H24JigyoKatsudo.pdf>,

(accessed 2013-6-13).

- 5) 岩永秀子, 山本昇：看護学生の自己教育力に及ぼす看護婦イメージの影響, *日本看護学教育学会誌*, 7(3), 17-27, 1997.
- 6) 門脇千恵, 白井千津：看護系大学生がもつ看護職に対するイメージ構造, *日本看護学教育学会誌*, 10(2), 179, 2000.
- 7) 國重絵美：看護職の職業認識尺度の開発とその信頼性, 妥当性の検討, *日本看護学教育学会誌*, 12(2), 15-24, 2002.
- 8) 林喜美子, 松本明美他：看護婦と看護職のイメージに影響を及ぼす諸要因, *川崎医療短期大学紀要*, 61-66, 1990.
- 9) 真鍋淳子, 野尻雅美他：看護学生の看護婦イメージの研究 大学生と短大生の比較, *看護教育*, 35(6), 427, 1994.
- 10) 和田佳子, 大石武信他：看護婦イメージに関する研究(3), *新潟県立看護短期大学紀要*, 7, 77-84, 2001.
- 11) 工藤由紀子, 石井範子：看護系大学生の看護に対するイメージ-入学時における家族背景・入学動機と卒業後進路志望との関連から-, *秋田大学医学部保健学科紀要*, 11(2), 119-126, 2003.
- 12) 石田真知子, 吉田信彌：看護婦のコミットメント尺度の因子の独立性, *日本心理学会第62回大会発表論文集*, 352, 1998.
- 13) 石田真知子, 柏倉栄子, 杉山敏子：看護学生のキャリアコミットメント尺度の検討, *東北大学医療技術短期大学紀要*, 8(1), 87-93, 1999.
- 14) 厚生労働省：平成22年衛生行政報告例（就業医療関係者）結果の概況, 平成23年7月12日, http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/10/dl/h22_gaikyo.pdf (accessed 2013-6-13).
- 15) 日本看護系大学協議会データベース整備・検討委員会：看護系大学の教育等に関するデータベース報告書・2011状況調査, 105, 2013.
<http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2012/12/H23ServerResults.pdf.pdf>, (accessed 2013-6-13).
- 16) 前掲15)
- 17) 重本津多子, 室津史子：看護学生の看護に対するイメージおよび入学動機と職業的同一性形成との関連, *医学と生物学*, 157(1), 61-69, 2013.
- 18) 江口瞳, 寺澤孝文：看護婦イメージの因子構造と学年進行による看護婦イメージ得点の変化, *日本看護研究学会雑誌*, 29(4), 71-80, 2006.
- 19) 前掲8)
- 20) 前掲5)
- 21) 石田真知子, 柏倉栄子, 杉山敏子：学年進行に伴う看護学生のキャリアコミットメントの変化, *東北大学医療技術短期大学紀要*, 10(2), 83-89, 2001.
- 22) 菊池昭江：看護学部3年生の学習意欲とソーシャルサポー

トの特徴－1年次と3年次の縦断的調査より－,日本看護学
教育学会誌,13(3),29-37,2004.

コミットメント～入学後2年間における経時的变化～,愛媛
県立医療技術大学紀要,3(1),59-66,2006.

23) 矢野紀子,羽田野花美,酒井淳子,他:看護系大学生の職業